新種イスミスズカケの発見

斎　木　健　一

千葉県立中央博物館では、県内市町村の植物相調査を行っています。調査を行うことになった市町村を1km角の四角に区切り、全ての四角に赴いてそこにどのような種類の植物が生育しているか、調べるのです。一番始めに調べたのが、館山市、その次がいすみ市と大多喜町でした。当時の中央博調査チームは天野誠、御巫由紀、斎木と大場達之元副館長でした。いすみ市や大多喜町の植物は、博物館の調査が入る前から茂原市にお住まいの野口昭造さんが折に触れて調べていらっしゃいました。いすみ市と大多喜町の植物調査を行うことが決まり、野口さんは、シダ類に詳しい倉俣武男さんとともに植物調査に協力して下さることになりました。

調査にあたっては、まず、いすみ市と大多喜町役場にお願いして採集ボランティアを募集しました。調査区域の面積は広く、博物館のチームによる調査だけでは十分な資料が得られないのです。応募して下さった方々には、まず、平成21年(2009)４月下旬にいすみ市と大多喜町でそれぞれ説明会を開き、調査方法、標本の作り方などの講習を受けていただきました。

この間、植物調査や標本づくりについては十分な経験をお持ちだった野口さんと倉俣さんは、独自に植物調査の下調べを行っていました。そんななか、５月４日に野口さんは、川沿いの崖にそれまで千葉では見たことのない植物を見つけました。届けられた標本をみて、博物館では当初、四国などに自生するスズカケソウだと考えていました。スズカケソウはオオバコ科の植物で、現在では岐阜県と徳島県でのみ生育が確認されている植物です。野生のスズカケソウは貴重ですが、栽培品もたくさん出回っています。見つかったスズカケソウが野生のものか、栽培品が逃げだしたものかを調べるために、県の自然保護課を経由して千葉大学の上原浩一先生に遺伝子解析が依頼されました。上原氏は遺伝子解析を行うと同時に、栽培品のスズカケソウも入手して調べました。ここで氏は栽培品のスズカケソウといすみ市の標本に葉の形や毛の量などの違いがあることに気付きました。そして栽培品といすみ市の「スズカケソウ」の遺伝子を比較したところ、違う系統であることがわかったのです。

新種と認められるためには、今までにその種が報告されていないことを証明した論文を発表しなければなりません。国内外の標本との比較などを経て、2013年、いすみの「スズカケソウ」が新種であることを証明する

いすみ市で行われたボランティア研修会での一コマ

論文を、発表することができました。新種の学名は、発見者の野口さんにちなんで、ヴェロニカシュトルムノグチイ（*Veronicastrum noguchii*）、和名は産地にちなんでイスミスズカケとしました。その後、野口さんを囲んでささやかな宴を催したのは懐かしい思い出です。

イスミスズカケは新聞やテレビでも取り上げられました。ただ、表には出ませんが、いすみ市と大多喜町の調査には、野口さんや倉俣さん以外にも多くの方々の御協力をいただきました。標本採集をされたボランティアの安藤亮太、和泉　宏、今井千恵子、木原　薫、木原武一、佐藤権三郎、鈴木章正、鈴木堅司、関　幸夫、土屋喜久夫、露崎与孝、中谷理恵子、中村よしえ、野 ミイ、松﨑要子、松丸挙一、宮本久子、向井春夫、茂木祐子、山本悦子、米田優子、渡辺美利の各氏、博物館の採集に同行し補助して下さった久保田三栄子氏、標本データを作成した金子尚子氏、須賀はる子氏、博物館チームの採集品を標本化された原田葉子、平山久美子、茎田るみ子、御船順子、今井節子、高橋ゆき、松井秀子の各氏です。

こうして記すと博物館の活動が、いかに多くの方々に支えられているかを改めて感じます。これからも県民の皆様とともに歩む博物館でありたいと思っています。

（教育普及課）